鵠沼海岸商店街

18N1063　霜島かのん

別荘地としての発展

1886(明治16)年に鵠沼海岸海水浴場が開設された。当時は観光というよりも、結核の治療にいいとされていた塩湯治が主な目的だった。ここでは感染してからの療養ではなく予防するために使われていた。

夫は東京で仕事をし、妻と子供が鵠沼に住むという形が一般的になり、子供のための学校が建てられて行った。

それ以降、鵠沼海岸は別荘地として開発されていった。明治30年代になると別荘の御用聞きを中心に商業活動が始まった。御用聞きとは今でいう訪問販売のようなものだ。

別荘地としての発展

夏以外は宿が安くなるため多くの文豪が訪れた。志賀直哉と武者小路実篤が白樺派を結成したのもこの辺りだと言われている。
明治30年代から旅館なども増え始める。旅館東屋は跡地に記念碑が建てられ、今でも歴史を感じることができる。

1902(明治35)年には江ノ島電鉄、
1929(昭和4)年には小田急電鉄が開通したこともさらなる発展に繋がった。

関東大震災

1923(大正12)年の関東大震災からの復興の際、別荘地から**定住の高級住宅街**に移り変わっていった。この背景にはその他の別荘地にはあまりない店が充実していたことがある。
それは住宅建設およびメンテナンスに関わる店だ。
屋根屋、畳屋、ガラス屋、電気工事屋、造園業、建具屋、建設業、井戸屋など。家を建てるのに必要な業者はひと通り揃っている。
そのため、他の別荘地より早く**定住化**が進んだと考えられる。

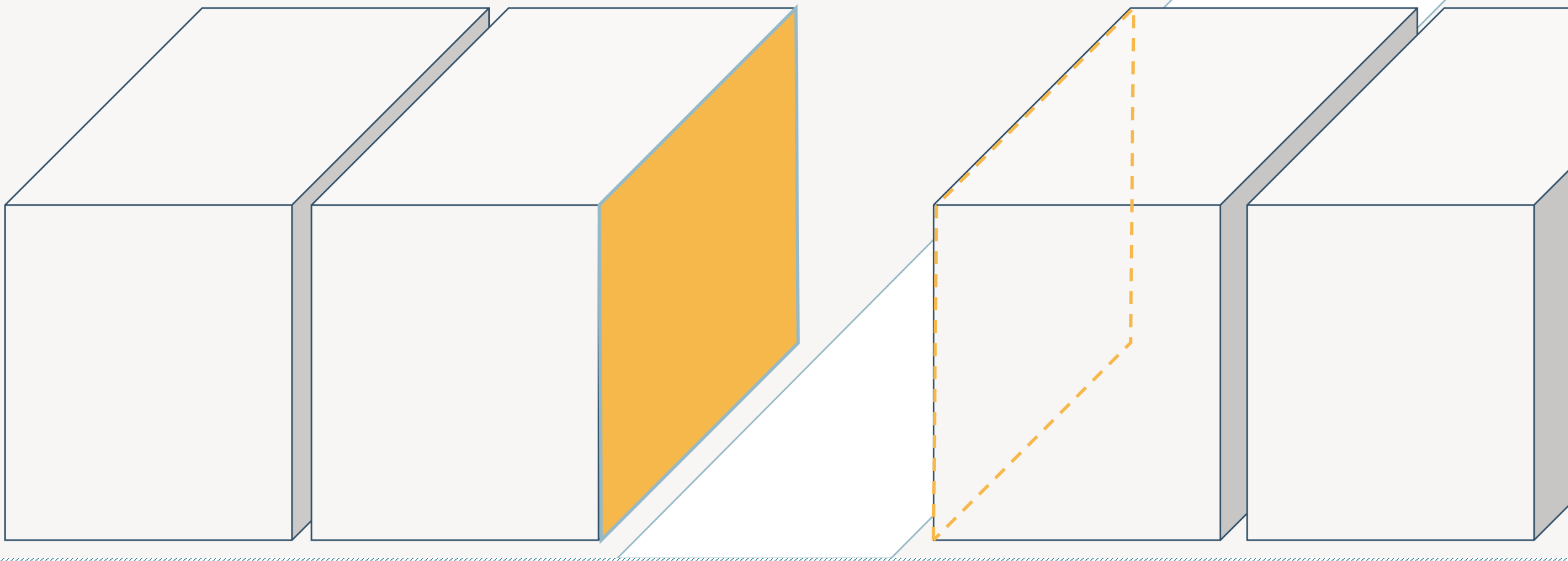
逆にこの商店街に全くなかったのが
薬局、髪結い(女性の)、歯科医である。不思議なことに現在の商店街にはこの3つの店は多すぎるのではないかというほどに並んでいる。
少し横道にはいったところも合わせると
薬局６、美容院１３、歯科医１０

戦後の変化

戦後この辺りの家の多くは進駐軍に取り上げられ、厚木基地や横須賀基地に進駐した米軍人が休暇になるとマリンスポーツをしにやってきた。ここで日本にサーフィンというスポーツがやってきたとされている。

戦後の新しいアメリカの文化と、別荘地由来の松林や竹垣、玉石垣が共存するところが鵠沼の魅力の一つだ。

商店街とそこから横に伸びる道との関係を考えるために、角のお店に注目した。
下図の黄色い側面に看板や入り口などを置いている店と、完全に壁だけか裏口のみの店などがあった。



商店街

似た形の二つの店を比較すると、わかりやすい違いが見えた。どちらも店の中にショーケースのようなものがあり、商品が並んでいる。

上の店は角が柱になっており、両側から入れるようになっている。看板も両側に大きく設けてある。

下の店は完全に簾で閉じられており、商店街側からしか入れないようになっている。また、看板もないので横道からきた人は正面まで来ないとなんのお店かわからない。

横道を比べて見ると、上は海につながっている道で観光客もよく通る道だ。下は駅の裏につながり、観光客というより北側の住宅街に住む地元の人たちがよく通る道だ。

石畳が続いているので駅前まで商店街が続いていると考えた。この角はどちらも駅に向かう道を向いている。

この先は行き止まりで住宅街しかない。

この三つの道は全て海にいける道である。

商店街周辺は海側も陸側も同じくらい飲食店などのお店があり、商店街から離れると完全に住宅街になる。海側は住宅街の先に大きな道路が一本あり海に続く。
海側だけ、や、海に行く道だけ、が著しく栄えているのではなく全体的に栄えている印象を受けた。その中にも観光客が多く通る道には看板を大きくしたり開口を大きくしたりといった特徴が見られた。夏は海水浴客や花火の観覧者が多く訪れる一方、昼間は地元の主婦たちが自転車で行き交い、夜になると常連らしき客たちで盛り上がる居酒屋がある。観光客と地元の人たちの両方に支えられている素敵な商店街だと思う。

参考文献

https://itot.jp/14205/709
https://kurobe56.net/ks/ks0263.htm
https://maruyama-urban.co.jp/blog/【まち紹介】藤沢市鵠沼海岸-一別荘文化が息づくまち/
http://www.isagoji.jp/school.html